



《新会員のひと言》

## 歴史と音楽の

### 魅惑に

渡辺 宗子

私のポーランドは、民族音楽とその楽器そして、ドイツとロシアに挟まれ併合の憂き目や破壊の痛手を受けた歴史などを遠くに感じていただけでしたが、その国の独立回復百周年記念に因んだ慶賀にお声がけを戴き、魅惑的な催しに感動し参加させていただきました。

常に警戒を必要とした国の団結の堅さや指導的役割を果たした芸術・音楽・科学者たちが国民の受難を支え悲運を梃子に民族心を高揚させ、二十世紀初頭、祖国の独立と自由を獲得、めでたく世界の慶瑞となったのです。私はこの会場で、ポーランドに飛び込みました。そして「ブロニスワフ・ピウスツキ」の講演・映画・朗読に没頭しました。

人類学者ピウスツキの生涯に樺太・北海道アイヌの方々等々、ごく身近かな生活圏内で展(ひろ)げられるまだ生々しいロマンの悲歌に感応したのはいまでもありません。

ずっと以前、白老ポロト湖畔にあったアイヌ民族博物館に幾度も訪れながら、ピウスツキの像を知らず、平取の二風谷でも突然現われたアイヌ風俗巨像の色彩豊かな宮殿かとまがう建造物に仰天したことなど、一連の繋がりが持てました。

二次会にも参加させていただき、ポーランドの方や協会の方々の親しみ溢れる温かな抱擁に深い感慨を覚え、ショパンの楽奏と共に朧に映画(「灰とダイヤモンド」「地下水道」)の記憶をまさぐっておりました。(わたなべ・そうこ)

## アウシュビッツ

### への旅

土橋 芳美



北星学園大学が一九九五年に企画した「平和の旅」で姉と共に初めてポーランドを訪れた。

この旅で考えさせられたことは多くあったが、特に「戦争」と向きあうことになった人間の在り様についてだ。

アウシュビッツ強制収容所を訪れたときの、大地から立ち上がる呻きにも似た空気におののいた。

ガス室に入れられる前に切られたという女性の髪の毛の山、三つ編みにされた幼女の髪の毛の先に結ばれていたピンクのリボン。

大型の旅行カバンの山々、いずれ戻ると信じて書かれたであろう、くわしい住所と名前。

人間の住まいとは思えない三段になった寝床など、そこからあがる悲鳴が聞こえるような気がした。

外に出ると、空は晴れ、空気は澄んで美しく、野の花が咲き風に揺れていた。

帰国してすぐに、画家である姉は百三十号もの大作「アウシュビッツ」を描いた。

私は今も言葉を紡げずにいる。

どんな試練のなかからでも、何度でも立ち上がり、それでも人間は素晴らしいと詩(うた)ってくれた、ポーランド市民に学びたい。(どばし・よしみ)

## ポーランド語との

### 格闘始める

村田 雄穂



新入会員の村田です。帯広市在住で、イタリア語の通訳及び翻訳を行いつつ、「帯広イタリア言語文化教室」を開設し、イタリア語などのレッスンもしています。つまり、専門はイタリア語です。

そんな私が「ポーランド」に関心を持ち始めた、そのきっかけは『PRESTO CON FUOCO』(ロベルト・コトロネオ著)というイタリア語の小説を読んだからです。この邦訳もあり『ショパン 炎のバラード』という邦題で集英社(2010)から出版されています。

内容は、ショパンの「バラード第四番作品 52」には、実は未発表のフィナーレ部分があったのだ、という設定で、その未発表楽譜の手稿をめぐる音楽歴史ミステリー仕立ての小説です。

それを読む過程で私に関心を抱いたのは、ポーランドの「バラード」という文学形式です。ショパンのピアノ曲バラード四部作は、アダム・ミツキューヴィチらの文学作品「バラード」から着想を得たという伝説が存在するようですね。その正否はともかく、私は、まずミツキューヴィチの「バラード」の日本語訳を読んでみましたが、これはなかなか興味深い内容でした。でも、基本的にこれは「詩」ですから、ポーランド語の音の響き無しではやはり物足りない。

それで、1年ほど前からポーランド語を学び始めました。帯広にはポーランド語を学べる講座はありませんから、市販のテキストを使い細々と独学をしております。(むらた・ゆうほ)